



国家汉办/孔子学院总部
Hanban/Confucius Institute Headquarters

《中国思想家评传》简明读本 日中文对照版

主编 周宪 程爱民

童强 李燕喜 著

赵建勋 译

秦始皇

北陆大学出版会
南京大学出版社



《中国思想家评传》简明读本·日中文对照版

主编 周宪 程爱民

童强 李燕喜 著

赵建勋 译

秦始皇

北陆大学出版会
南京大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

秦始皇:日汉对照 / 童强,李燕喜著;(日)赵建勋
译. —南京:南京大学出版社,2012. 11
(中国思想家评传丛书简明读本/周宪,程爱民主编)
ISBN 978-7-305-10781-8

I. ①秦… II. ①童…②李…③赵… III. ①秦始皇
(前 259~前 210)—评传—日、汉 IV. ①K827=33

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2012)第 270136 号

出版发行 南京大学出版社
社 址 南京市汉口路 22 号 邮 编 210093
网 址 <http://www.NjupCo.com>
出版人 左 健

丛 书 名 《中国思想家评传》简明读本·日中文对照版
书 名 秦始皇
著 者 童 强 李燕喜
译 者 赵建勋
责任编辑 田 雁 编辑热线 025-83596027

照 排 南京紫藤制版印务中心
印 刷 江苏徐州新华印刷厂
开 本 850×1168 1/32 印张 6.875 字数 164 千
版 次 2012 年 11 月第 1 版 2012 年 11 月第 1 次印刷
ISBN 978-7-305-10781-8
定 价 20.00 元

发行热线 025-83594756
电子邮箱 Press@NjupCo.com
Sales@NjupCo.com(市场部)

* 版权所有,侵权必究

* 凡购买南大版图书,如有印装质量问题,请与所购
图书销售部门联系调换

序

古代中国は人類の文明にとっても精神にとっても、ゆりかごのようなものです。

ドイツ人哲学者カール・ヤスパース(Karl Jaspers, 1883～1969)の見解によれば、エジプト、メソポタミア、インド、中国の四大文明の発祥の後、紀元前 800 年から紀元前 200 年の間、おもに紀元前 500 年を中心に、世界中に連続した体系的な文明がふたたび生まれたということです。この時代のことを彼は軸軸時代(Axial Age)と呼んでいます。これらの文明には大思想家たちが現れ、彼らは人類や世界の根源的諸問題について思索し、^{けだつ}解脱や超越の目標と方法について示唆したのです。たとえば、中国の孔子、老子、墨子、莊子などの思想家たちや、インドのウパニシャド(奥義書)や釈迦、ギリシャの詩人ホメロス、悲劇詩人のトゥキディデイス、哲学者のヘラクレイトス、プラトン、アリストテレス、さらにパレスチナの思想家たちが、中国、インドおよび西方諸国の、それぞれ相互に交流のない地域において、ほとんど同時に出現したのです。そして、彼ら大思想家たちが創り上げた思想的様式および世界的な宗教は、現代もなお人類に精神のよりどころとされていて、彼らは今もなお我々の生活とともにあるのです。

さて、中国五千年の文明の歴史を座標として、ヤスパースの視点を重ね合わせると、紀元前 551 年から紀元前 479 年の間に生きた孔子は、まさに中国文明がこの軸軸時代にさしかかったころの代表的人物であり、彼はこの五千年の中間点あるいは折り返し地点にあったと言えます。



黄河文明の発祥から孔子の時代に至るまでと、孔子の時代から我々の現代に至るまでは、ともにそれぞれ2500年前後を数えることができます。孔子が現われる前には、中国に思想というものはあっても思想家は存在しませんでした。孔子以降、中国にも古代思想家たちが次々と現れて、彼らは中華民族だけでなく全人類にとっても価値のある豊かな思想的遺産を残したのです。孔子が唱えた「故きを温めて新しきを知る」^①とか「信じて古えを好む」^②といった思想上の原則は、中国の伝統を重んじるという姿勢に影響を及ぼしました。すなわち、古人の思想的遺産を尊重し、立ち止まることなく古人の思想を理解しそれを発展させ続け、その中から思考や宇宙・社会・人生問題に対応するためのすべを人々は獲得したのです。このことこそが、我々が今この『中国思想家評伝』簡明読本版(日本語版『中国著名歴史人物集』)を世に問う理由でもあります。

中国の悠久なる古代思想史を見渡すと、思想家たちが貢献した成果には深い造詣と高い価値があり、それは世界思想史上において独自の旗印を掲げるものとなりました。それら数々の思想は現代の中国あるいは世界にとっても、日々新しく生まれ、生命力にあふれたものと言えます。百家争鳴の先秦諸子、スケールの大きな含蓄のある漢や唐の経学^③、親しみやすく幽玄な魏晉の玄学^④や、知性を尽くした宋や明の理学^⑤など、

① 『論語』「為政」(訳者注)。

② 『論語』「術而」(訳者注)。

③ 儒教古典の解釈学。(訳者注)

④ 『老子』『莊子』『易』を尊崇する学風。(訳者注)

⑤ 人間の道德性や天と人を貫くことわり(理)を追求する新儒学。(訳者注)

どれも思想学術のあでやかな花であり、仏教の色即是空の悟りや道教の神仙修養は宗教的信仰の沃土^{よぐど}と言えましょう。そのほかにも、経世済民^①の政治・経済思想や自然の理をも乗り越えようとする巧みの科学技術や工芸の道、風雅の真髓に迫り、彩りの落ちることのない文学芸術……これらすべてにわたって豊かな思想を醸^{かも}し出しています。中国の思想はそれぞれが時には水と火の関係のように相容れることなく激しく論争し合ったかと思うと、さまざまな思想が合致し合い、道は異なれども同じところに行き着いたりしましたし、また、いろいろな学派が生まれ林立したかと思うと、それらが互いに啓発し合い、奥義を究めていったりしました。儒、仏、道の三教も論争のなかから融合し、さまざまな思想がともに行われて、対立しませんでした。このように、中国思想の成立は豊富で多彩なものであり、天人合一^②、知行合一^③、剛健中和^④などの精神的伝統を貫きつつ、継承や解釈をしていきながら変遷し、一代ごとに研ぎ澄まされ、総合と新奇の特色を表し続けてきたのです。

中国古代思想史には、思想家とか思索者とか、哲学者などといった言い方や概念はなく、聖人、賢人、哲人、智者、諸子、大師などの呼称があるだけです。とはいえ、こうした呼称こそがまさに中国古代思想家の特徴を概括していると言えます。彼らの社会的身分は、たいていが教師か学者でしたが、それは彼らの思想が道徳と智慧^{ちゑ}を追求したものだった

① 世を治め、民の苦しみを救うこと。(訳者注)

② 人の行為は天と連動していることを強調する考え方。(訳者注)

③ 知って行わないのは、未だ知らないことと同じであることを主張した実践重視の教え。(訳者注)

④ 強く健やかでありつつ、異なる性質を持った者同士が交わること。(訳者注)



からです。もちろん、より広い範囲から見れば、中国古代思想は、政治、軍事、経済、法律、工芸、科学技術、文学、芸術、宗教など多くの文明的領域において、大きな貢献をしましたが、創始者や集大成者など傑出した人物の言論や著作、あるいは弟子たちによってまとめられた言行録などこそが中国古代思想の重要な内容なのです。中国人は、孔子以前にすでに、「功を立て」、「徳を立て」、「言を立て」の「三不朽」といった、超越を追求するための道しるべを作り上げましたが、これら人類社会のために立ち立てた大きな功績、個人的道德修行の完遂と思想、智慧、学説などのすべてはまさに不朽の歴史的遺産とも言えます。こうした意味から言えば、中国思想家たちの手による成果は、我々現代人が慣れ親しんだ職業思想家、哲学者あるいは宗教的先知をも大きく超えていると言えましょう。そして、我々が『中国思想家評伝』簡明読本を執筆するにあたって、こうした基準に基づいて思想家たちを選びました。

さて、南京大学名誉学長の故^{きょう あめい}匡 亜明教授の監修を仰いで、南京大学出版社より出版された『中国思想家評伝叢書』は、中国 20 世紀以来、最も広大な中国思想家研究の成果と言えましょう。今回、簡明読本叢書の編集出版にあたって、まずこの200 冊にもおよぶ『中国思想家評伝叢書』の労苦に深い敬意を表すものであります。この巨人の双肩に依りつつ、本簡明読本においても、学術的基礎を保持しながら、なおかつそこにいくらかの新鮮味を加えたつもりです。その新鮮味とは内容は深いままに表現は分かりやすくし、より広範な読者をも惹きつけるものにしたことであります。思索と読みやすい表現、生き生きとした物語と智慧……中国文化の「拡大」と文化のグローバル化を提唱する今日、この読本による古代中国思想家たちの紹介を通して、中国思想に関心を

持たれる読者のみなさんが、我々と古人たちとがともに直面する一つ一つの問題を掲げながら、古代の中国思想家たちと胸襟を開いた対話をされることを期してやみません。

編集委員会

2008 年 9 月

目次(日文版)

序	1
一、前言	1
二、帝王の誕生	4
三、成長してゆく	10
四、六国併呑	24
五、凶窮まりヒ首見はる	31
六、齊・楚と決戦	39
七、帝国の偉業	47
八、度量衡と文字の統一	62
九、領土開拓	71
十、帝国の大土木事業	75
十一、現実と仙境の中で散歩	93
十二、帝国崩壊	105
訳者あとがき	123

目录(中文版)

总序	127
一、引言	131
二、君王的诞生	133
三、走向成熟	137
四、吞并六国	146
五、图穷而匕首见	151
六、决战齐楚	156
七、帝国的鸿业	161
八、统一度量衡与文字	170
九、开拓边疆	175
十、帝国工程	178
十一、巡游在现实与仙境中	189
十二、帝国的崩溃	196

一、前 言

今よりさかのぼること2,200年前、中国という果てしなく広がる大地に、ひとつの帝国が誕生しました。これが秦王朝です。

自らを始皇帝と名乗ったその君主の姓は嬴(えい)、名は政(せい)といい、古代中国で最も偉大な帝王の一人です。紀元前221年に、彼は10年間という短い時間で、他の六つの諸侯国の斉、楚、燕、趙、韓、魏を併吞し、中国戦国時代以来数



秦始皇画像

百年続いた分裂割拠の局面を終わらせ、中国の歴史上初めて国家統一を実現させました。

この帝国の国土は果てしなく広がり、東は渤海、黄海、西は甘粛、寧夏、南は南海、北は万里の長城まで及びます。そしてこれらの地域を初めて中国の領土として定めました。以来、中国人はずっとこの広々としている大地をもつ国家を当然のように思っています。これは秦始皇帝が中国を統一したことによるものだと考えられます。

秦始皇帝は新興帝国を創立後、すぐに思いきった改革を進めました。秦は中央集権を推進し、完備された系統だった統制方式を確立しました。政治の面では、皇帝の権力を中心とし、その下には、三公、九卿などの朝廷官職を設け、伝統的な封建制を廃止し、郡、県2級の主要な行政



区画を設け、経済の面では、度量衡(長さ・重さ・面積・容積などを計測する単位)と貨幣制度を統一させ、思想の面では、模範的な観念や道徳を提唱しました。また、司法制度の面においても、統一的な法律を制定し、その法に基づいて国を治め、厳格に法律を執行しました。文化の面では、文字を統一し、共通の中華文化と中華民族の心理的な特性を形成させました。

始皇帝自らの指揮下で、秦帝国は様々な土木事業を行いました。例えば、鄭国渠(用水路)、靈渠(用水路)、馳道(道路)、世界的に有名な万里の長城、咸陽宮廷(阿房宮)、驪山陵墓(兵馬俑を含む)などがあります。これらの大規模な建築物、特に万里の長城、兵馬俑など、当時、世間の人々が驚嘆しただけではなく、今でも世界の奇跡と言えるでしょう。巨大な建築物は秦帝国の権力の象徴であり、ひいては権力そのものであると言えます。

天下を治めるため、また自らが帝国の豊かさを経験するため、始皇帝は封禪(ほうぜん)、すなわち天と地に対して感謝する儀式を行い、何度も大規模な巡幸(各地視察)を行いました。古代では、天子が宮殿を建て、陵墓を築き、封禪と巡幸を行うのは、すべて儀礼にあたるのですが、始皇帝はそれまでの規模をはるかに超えた儀礼を行ったため、人民の負担を強めました。そして、厳罰と重税によって、人民の始皇帝に対する不満が強まっていきました。晩年になると、始皇帝は不老不死の薬を求めるために、多大な財力を使いました。そのことで、人民の支持はますますなくなっていきました。紀元前 210 年、始皇帝は巡幸の途中で病死したため、彼の息子の胡亥が王位を継ぎ、秦二世皇帝になりました。しかし彼には帝国の政治を改善する力が全くなかったため、始皇帝の

死後3年たらずで、巨大な秦帝国は、たちまち滅亡していききました。

物換星移(ぶっかん-せいい、世の中が移り変わること)、歳月が過ぎゆき、長い年月を経た今になっても、私たちはこの帝王と彼のつくった帝国について熱い議論を交わしています。彼は一人の偉大な君主であり、また一人の暴君であったことに間違いはありません。彼は並外れた知力と計略を持っていましたが、政策においては多くのミスを犯しました。六国を併合した時の彼の判断は現実的かつ正確なものでしたが、晩年になると仙人の世界や不老不死の術に心を奪われてしまいました。彼の軍隊はかつて天下無敵で、その軍隊で守っていた帝国は難攻不落のはずでした。しかしその帝国は、蜂起する農夫たちの攻撃を受け、滅亡への道をたどることとなったのです。

しかし、いずれにせよ、彼がそれまでの国家乱立の時代に終止符を打ち、国家統一を果たした新しい時代の創始者であることには間違いはありません。

二、帝王の誕生

帝王の降誕はいつも神秘的であるべきなのでしょう。しかし秦王朝はあまりにも短い期間で崩壊してしまったため、始皇帝の誕生について神秘的な話となることはできませんでした。

始皇帝の父・子楚は戦国時代の秦国の王子でしたが、趙国で人質としての生活を送っていました。戦国時代においては、諸侯国間の戦争は頻発し、両国間に同盟関係を結ぶため、互いに皇族を人質として交換する習慣がありました。通常、人質は他国で優遇を受けますが、盟約に背けば、人質は生命の危険にさらされます。

趙国において子楚は決して優遇されてはいませんでした。秦国と趙国の間では、度々戦争がおこっていたため、子楚は絶えず危険な状況に置かれていました。紀元前 260 年、秦国が韓国を攻撃しました。韓国が趙国に投降したため、秦国の軍隊は趙国に侵攻しました。秦国の軍隊と趙国の軍隊は長平(現在の山西省高平市の近く)での激戦の末、趙国は敗戦し、40 数万もの趙兵が殺されました。その後、秦国の軍隊は趙国の国都邯鄲を包囲し、攻撃を開始しました。このような状況において、敵国の人質であった子楚は、優遇を受けることはありませんでした。子楚は秦国からわずかなお金しかもらえず、貧しい生活を強いられていたのです。

その頃、各国を渡り歩き商売をしていた魏国の大商人呂不韋は、邯鄲で苦しい生活を強いられていた子楚に出会いました。呂不韋は子楚を哀れに思いながらも、「これは奇貨なり。奇貨置くべし。(これは珍し

い品物だ。これを買って置くべきだ)」とつぶやきました。これは、珍しい財物は蓄えておいて、値上がりを待つべきだという意味です。呂不韋は子楚を一目見て気に入りました。彼は大きな利益を得る機会と自分の明るく広がる前途を見ました。

彼は父親に聞きました。

「農業では、どれだけの利益を得ることができますか。」

「10 倍である。」と父親は答えました。

「真珠や寶石を商売をすると、どれだけの利益を得ることができますか。」

「100 倍である。」

「王子を助けて王位につかせるとは、どれだけの利益を得ることができますか。」

「無限である。」

呂不韋は次のように言いました。

「農業をし、苦勞して働いても十分な生活ができません。もし君主を補佐し、国家を安定させることができたなら、子孫代々恵まれた生活ができるでしょう。私はこのようなことをやってみたいです。」

呂不韋は子楚が秦国の王位を受け継ぐことができるように援助しようとしていました。落ちぶれていた子楚は呂不韋の計画を聞き、何度もお礼を言いました。子楚にとっては思いもよらない計画だったのです。子楚は即座に「もしあなたの計画が成功したら、秦国の土地をあなたと分けましょう。」と言いました。

その頃、秦国の昭襄王(子楚の祖父)はまだ在位中で、子楚の父親の安国君は太子でした。安国君には息子が20 余りいましたが、長男ではな



い子楚は、寵愛を受けておらず、安国君の後継者となることはとても難しいことでした。

安国君は華陽夫人とよばれる女性を愛し、この女性がいなければいられないほどの寵愛ぶりでした。華陽夫人に息子がいれば、間違いなくその子が後継者となったでしょう。しかし、どうしたわけか華陽夫人は子供を授かることはありませんでした。このことは子楚にとって絶好のチャンスであると呂不韋は考えました。

企業の経営、生産は、現代の中国語で「経済」と言いますが、国を治めることも、古代の中国語では「経済」と言いました。確かに、商業を営むことと政治には共通点があります。呂不韋の商業における成功は、政治においても生かされることになりました。

呂不韋は子楚に多大な財力を投じると同時に、名声高い人々と広く交際させることで、高い名声を得ることに成功したのです。一方で、自らは秦国の国都咸陽に赴いて、華陽夫人の説得にあたりました。彼は子楚の人柄と知恵がいかに優れているかということ、そして、子楚が趙国で安国君と華陽夫人を慕い続け、いつもひっそりと涙を流していることを伝えたのです。華陽夫人はとても喜び、子楚に好意を抱くようになりました。

また、呂不韋は多くの財力を投じ、華陽夫人の姉とも面会し、華陽夫人を説得するよう働きかけたのです。

姉は華陽夫人に言いました。

「女性が男性の寵愛を受けるのは美しさゆえで、年齢を重ねれば、寵愛を失うことになるでしょう。今、夫人は安国君の寵愛を受けていますが、子供がいません。子供がいれば、年齢を重ね、寵愛を失ったとして

も、子供が面倒を見てくれるでしょう。だから、今のうちに若君の中から有能で親孝行な子を選んで、養子に迎え、その子を安国君の後継者にしてはどうでしょう。そうすれば、安国君が生きている間、夫人は尊重されるのは当然のことですが、安国君が亡くなった後も、その子が君主になるので、夫人が地位を失うことはありません。」

華陽夫人はその話を聞き、はっとし、尋ねました。

「だれを養子にしたらいいでしょう。」

「多くの若君の中でも、子楚はたいへん聡明で、非常に親孝行です。彼の母親はすでに安国君の寵愛を失っているため、彼は自分が王位の後継者ではないことを理解しています。もし夫人が彼を養子として選ぶのなら、彼はきっと喜ぶでしょう。」

華陽夫人はその話を受け入れることにしました。その後、安国君は華陽夫人の願いを聞き、夫人と玉符を刻して、子楚を跡継ぎとすることを約束し、子楚を王位の後継者としました。それと同時に、安国君は呂不韋に子楚を補佐するよう命じました。その後、子楚の各諸侯国での名声はますます高まっていきました。

呂不韋には美しい容貌を持ち、歌や踊りに長けた趙姫という若い愛妾がいました。ある日、子楚が呂不韋の家を訪問した時、呂不韋は趙姫に酒を捧げに来させ、また踊らせました。子楚は趙姫の美しさや、踊る姿に心を揺さぶられ、一目で好きになり、譲ってくれるように頼んだのです。呂不韋は内心憤りを感じつつも、表に出ませんでした。もしも断ったら、子楚が自分から離れてしまい、元も子もありません。そこで気持ちを押さえ、趙姫を子楚に譲ったのです。

子楚は喜んで趙姫を連れて帰りました。しかし、趙姫は呂不韋と同